

## 第 113 話〈地方記者〉の要約と参考資料

### 第 113 話〈地方記者〉の要約

太平洋戦争後、高千穂に住んで地域密着の記事を書く新聞記者が誕生しました。日向日日新聞からのちに朝日新聞へ移った岩本利佐男記者が残した記事は、昭和 20 年代の土呂久鉱山の歩みを記録し、53 年半ばに中断していた亜ヒ酸製造再開に動き出したことを教えます。

### 第 113 話〈地方記者〉の参考資料

#### 1 1 3 - 1 敗戦直後（昭和 21～22 年）の土呂久鉱山

##### 小笠原貞利さんの話（1980 年 3 月 18 日聴取）

わしが昭和 21 年 1 月か 2 月に戦争から帰ってきた。土呂久鉱山に働きに出始めたのは 23 年 6 月。21 年～22 年までの中島鉱山は、従業員が 4, 5 人くらいで、鉱石は掘っていなかった。たいした仕事はしよらんかった。製材して、東岸寺の選鉱場跡でろくろを回してお盆とか、重箱をつくる。帝国鉱発は名前だけで、実際には土呂久で操業はしていない。機械を引揚げたのが帝国鉱発。政府がお金を入れていたんだらう。23 年 6 月には、ロクロ工場をやめてボチボチやりよった。所長は萩原。「坑内をとりあけてみよう」ということになり、わしが入社した。松本博則など、2, 3 人が入った。まず、大切坑だけとりあけた。昔掘ったあとがつぶれてしまっていた。坑口から 10m 木枠のところはつぶれ、それから 200m は岩盤であいていた。その奥はつぶれていた。その奥のところをとりあけて、340～350m までとりあけた。大切坑を掘りあけるまでは、選鉱にかけた砒鉱だけの製品（精砒）、錫とったあとの生鉱、これをフロストというが、これが 100 トンか 200 トンあった。これを売った。なくなったので、大切坑を掘りあけた。鶴嘴もたたんくらいに、フロストの上つ面は固まっていたが、中はやわかった。戦後に中島がやった順番は、1. 木工、2. フロストを佐賀関に売る、3. 大切坑の取りあけ。亜ヒ焼きは部落の許可がある。量がしれるので、ナマで佐賀関へ送った。新窯造るまで土呂久では焼いとらん。23 年 3 月和合会議事録に「鉱山の煙害に関する件」とあるのは、坑内でもやれば砒鉱が出るから、部落の了解を得ようというので、話を持ち込んだのではないか。

兵隊から戻って鉱山に雇われたのは 23 年 6 月。取り明くるから、技術者おらな始まらん、というので雇われた。このあと、中の採鉱をボチボチやった。水をポンプで引いて、採鉱の係に糟谷さんおることおった。その後、萩原さんを追いだして、糟谷さんが何年か係長をした。（23 年 10 月 18 日の）復興祭？ 覚えていない。特別変わったお祭りをやったことない。いっぱい飲ませたかも知らん。大切坑から下がったところはヒ鉱ということやったが、銅鉱もあった。パーセントのよいのを、カマス詰めしたり、量は知れとったが

送った。砒鉍は佐賀関に運送しよった。

砒フロス

根本亨「土呂久鉍山再建案」より

土呂久鉍山は戦後旧岩戸選鉍場の堆積砒フロスを売鉍しながら大切坑を取明け再開されたのであるが.....

コンサイス英和辞典より

**Flotation** 浮くこと。浮かべること。＜治＞浮遊選鉍。

**Floss** 繭綿。真綿。(とうもろこしの) ひげ。殻綿。浮き滓<溶鉄の表面に浮かぶ>以上を総合：砒フロスとは、浮遊選鉍によって錫を他の鉍石と分離した際、浮いて取り除かれた砒鉍のこと。これもまた精鉍ゆえただちに製錬へ回された。(川原) >

本邦鉍業ノ趨勢によれば

昭和 21 年 10 月 採掘に着手し、砒鉍を出鉍

宮崎県西臼杵郡五箇瀬川流域地質調査報告より

戦争中は錫及硼素資源として盛に採掘されたが、終戦後(昭和 22 年来)砒素鉍山として稼業を続け現在平均月 100 トンの採鉍をみている。此等の鉍石はトラックにて日ノ影駅へ搬出し、此処より汽車にて佐賀関及び直島製錬所へそれぞれ送っている。

1 1 3 - 2 1948 (昭和 23) 年の土呂久鉍山

閉鎖登記簿謄本より

昭和 23 年 3 月 3 日 役員を一新。鈴木仙氏が社長になる。

土呂久鉍業所所長の交代

昭和 23 年 6 月 萩原清三郎氏から糟谷正一氏に所長交代

高千穂町史年表より

1948 年(昭和 23) 10 月 18 日 土呂久鉍山硫砒鉄鉍の新鉍脈発見。復興祭を行なった。  
(中島産業)

昭和 23 年度重要鉍山及製錬所指定名簿(商工省鉍山局)より

福岡鉍山局

級別：B 鉍山名：土呂久 鉍種名：砒鉍 鉍業権者：中島産業 所在地：岩戸村

### 1 1 3 - 3 1949 (昭和 24) 年の土呂久鉱山

宮崎県西臼杵郡五箇瀬川流域地質調査報告 昭和 23 年鉱山関係書類綴 (大分県工務課) より

\*昭和 24 年 7 月 21 日より同月 25 日に至る 4 日間宮崎県庁よりの依頼に依り、下記の地域をそれぞれ分担調査した。 西臼杵郡岩戸村及び七折村 松隈寿紀

#### 3. 砒素鉱

今回の調査区内では砒素鉱山として稼業中のものは土呂久鉱山のみである。(略)  
土呂久鉱山に於ても、1. 製品たる亜砒酸の需要減少、2. 買鉱代金の支払の遅延、  
3. 輸送費の高額、4. 現地製錬の不可能等の理由に依って現状は余り芳しくない。

#### イ 土呂久鉱山

中島産業株式会社に依って稼業されている。戦争中は錫及砒素資源として盛に採掘されたが、終戦後 (昭和 22 年来) 砒素鉱山として稼業を続け現在平均月 100 トンの採鉱をみている。此等の鉱石はトラックにて日ノ影駅へ搬出し、此処より汽車にて佐賀関及び直島製錬所へそれぞれ送っている。本鉱山は秩父古生層に属する粘板 (2 字不明) 灰岩を貫く石英斑岩との接触部に生じた接触鉱床で錫石、硫砒鉄鉱、方鉛鉱、黄鉄鉱、内亜鉛鉱、白鉄鉱、黄銅鉱等の鉱石、鉱物を産するが、現在僅かに大切坑、1 号坑及下部 20m 坑道に於て採鉱がなされているに過ぎない。然し下部に至る程含銅率は良くなり、特に硫砒鉄鉱に次いで多産する方鉛鉱中にはやや多量の Ag を含有し、あるものでは 1000g/ton の含銀率を示し注目に値する。其処で今後の下部鉱体へ対する採鉱について緊急に鋭意調査を行う必要がある。

#### 中島鉱山の「会社経歴書」

岩戸鉱山は土呂久鉱山と改称。戦後直に砒素の生産に著しい成績を挙げ、次いで採鉱の結果、銅の富鉱体を補足し、更に現在の鉛亜鉛の大鉱体に着脈し、30 年末に於ける電気、機械、選鉱、輸送等坑内外設備の増改、改修を相俟ち、その前進は極めて期待されるに至った。

### 1 1 3 - 4 1951 (昭和 26) 年の土呂久鉱山

閉鎖登記簿謄本より

昭和 26 年 8 月 29 日 商号を中島鉱山株式会社に変更。

### 1 1 3 - 6 地方記者の土呂久取材

#### 笹山通氏の話（1979年5月17日聴取）

昭和27年3月から29年9月まで3年間、日向日日新聞高千穂支局長をした。支庁のジープに相乗りして、1日ばかりで土呂久に行った。泊まり込みで行ったこともある。鍾乳洞を見つけたことを記事にしたことなど思い出はある。新窯建設反対の記事（昭和28年7月12日付）は、私が書いたのかもしれない。記憶は薄れている。日向日日新聞の初代支局長は岩本利佐男氏。朝日新聞の通信員になったので、そのあと私が行った。その当時、朝日、毎日（田尻さん、嘱託で新聞販売店を兼ねていた）、西日本（田崎さん）と私が新聞記者として高千穂にいた。私が松尾鉦山について行った記憶はないが、書いてくれるように手配した記憶はある。昭和29年の12号台風のとき、国道がズタズタになって音信杜絶の状態の中を一昼夜高千穂から延岡まで歩いて、そのあと車で宮崎に行ったのを最後に転勤になった。（1979年5月の肩書は宮崎春秋社取締役社長）

#### 興梠敏夫氏（大正7年2月20日生）の「アンケート回答」より

◎土呂久鉦山とは、昭和30年から夕刊ポケット新聞（延岡市）高千穂支局長として39年まで、同39年からは夕刊デイリー新聞創立発刊と同時に60年退職までの30年間、鉦害問題以前の企業が関係した、操業に関する事、和合会との煙害に関する事、坑内出水に関する事、探鉦事業団、鉦山労組の（2字不明）、休山までの過程を機会あるごとに第三者的視覚で取材・報道した。

◎土呂久鉦山が休山後、“砒素公害”として私をはじめ報道したのは44年10月31日付の夕刊デイリー社会面トップ記事で全1ページ近いスペースを使い、鉦山地域の悲惨な問題点を社会に訴えた。

◎当時高千穂には、朝日新聞通信部、宮日支局があり、毎日、読売、西日本各社は延岡市に取材支局を置いていた。

◎私は、西臼杵地域の読売、MRTの通信員を兼務し、狭い地域が第二、第三の土呂久同様事件が発生した場合、“闘争”がどうあるべきかを輝かしく勝ち取った土呂久闘争は反省する事件でもあったと思う。私はことし73歳、土呂久山の赤い椿の花だけが事件の印象として残るだけである。

#### 113-7 土呂久取材記者

##### 小宮高樹氏よりのはがき（1977年8月31日消印）

旧い話になりますが、昭和28年9月17日、松尾鉦山の焙焼炉視察の一行の中に、朝日新聞社の高千穂通信員で岩本利佐男と云う方が加わっていたらしいので、消息が分かったら、此の方から何か新しい事実が判明するかもしれません。取り合えずご連絡迄。

#### 園田米男氏の話（1979年5月16日聴取）

日向日日新聞高千穂支局長の初代は岩本利佐男。二代目は笹山通（現・宮崎春秋社長）。当時のスクラップは、会社の資料として残っていない。

#### 笹山通氏の話（1979年5月17日聴取）

岩本は佐伯出身。終戦直後から日向日日の通信員でいた。昭和27年6月ごろ朝日の通信員になった。日南にいたし、本社にも行った。敗血病で死んだと聞く。高千穂のことに非常に詳しく、私はいっしょに取材について回った。

#### 朝日新聞宮崎支局井之上一夫支局長の調べ（1977年9月6日）

昭和43年の社員写真帳には、日南通信局長として岩本利佐男さんの名前がある。それから5年後の48年の写真集には載っていない。その間、校閲部員として本社に来たのは覚えているが……。現都城通信局長の岩本氏（昭和43年串間通信員）の話では、6年くらい前に敗血症で、病気にかかって2、3日で急死した。

#### 川原の質問に対する岩本年詮さんの回答（2021年6月22日）

1. 生まれたのは大分の佐伯で、生まれた年は何年でしたか。

答 大正5年12月20日生、大分県佐伯市出身。

2. 戦争中は兵隊でしたか。従軍したところがどこかわかりますか。

答 戦争中は兵として、中国に従軍。

3. 戦後、日向日日新聞高千穂支局に勤務されるのですが、そのいきさつが判っているならば教えてください。

答 戦後、日向日日新聞が高千穂町に支局を設けるとの事で、知人の紹介で初代支局長として赴任。

4. 日向日日新聞にいつからいつまで勤務したのでしょうか。

答 日向日日新聞在職は昭和22年位～昭和27年3月。私が昭和23年7月、高千穂町で生まれました。

5. 日向日日新聞の後任は笹山通さんでよろしいでしょうか。

答 年代から、笹山通さんに間違いないと思います。

6. 朝日新聞高千穂通信員として働いたのがいつからいつまでだったのでしょうか。

答 朝日新聞高千穂通信員（昭和27年6月～昭和35年前後）。朝日新聞宮崎支局高千穂駐在（昭和35年前後～昭和40年末）。

7. 朝日・高千穂の前任者はいたのでしょうか？ 岩本さんが最初だったのでしょうか。

答 朝日新聞高千穂通信員は父が最初だと思います。

8. 高千穂のあと日南通信局がいつからいつまでか。

答 日南通信局（昭和40年末～昭和43年3月）。

9. 日南のあと本社勤務がいつからいつまでか。

答 本社 編集庶務部（昭和 43 年 3 月～、同 45 年 2 月から校閲部へ異動）

10. 亡くなったのは 1971 年の何月でしたか。そのときの年齢は。

答 昭和 46 年 1 月 21 日死去、定年前の満 54 歳。死去時は校閲部。

11. 添付した 2 枚の日向日新聞に掲載された記事は、岩本記者が執筆したものだと思うのですが、いかがでしょうか。

答 昭和 23 年 10 月と 25 年 9 月です。父の高千穂支局時代と重なり、父が執筆したものではないでしょうか？

12. 年詮さんから、利佐男記者の朝日宮崎版の記事を探して送っていただきましたが、これはどこで見つけれられたのか、その経緯を教えてください。

答 私が送った朝日の記事は宮崎版ではなく、西部本社発行の社会面の記事です。当該記事を見つけた経緯は、昨年、川原さんとの知り合いを契機に、父がどんな記事を書いていたのか知りたくなりました。そこで北九州市立中央図書館が保管する過去の朝日新聞西部版で見つけました。コロナで休館中の為、昭和 31 年 11 月までしか調べていません。開館したら、また調べに行きます。何かありましたら、お知らせ致します。

朝日社報「朝日人」1971 年 3 月

岩本利佐男氏（西部本社校閲部）

1 月 21 日白血病のため北九州市小倉記念病院で死去。54 歳。昭和 27 年宮崎県の高千穂通信員となり、地方記者ひとすじにはげみ、40 年末日南通信局長、43 年 3 月編集庶務部員、45 年 2 月校閲部員。遺族は北九州市小倉区黒原本町 4 組中村アパートに夫人良子さんがおられる。

志水貢「古武士だった岩本さん」

がっちりした体格、日焼けしたような浅黒い顔に鋭く光る目。どことなく古武士の風格を備えた岩本さんだった。「病気にかかったことは一度もない」と自慢。およそ死とは縁遠い人のように思ったのだが……。もう一度、元気な顔を見せてくれと念じる知己や職場の友を残して、あなたは不帰の客となってしまった。

私が岩本さんと初めて会ったのは 10 年前の宮崎支局時代、何かの取材で神話の国、高千穂を訪れた時だった。名物のカップ酒をかわしながら話はずんだ。「俺は新聞記者を好いちよる。天下の朝日の記者だ。それでヨ……朝日の体面をけがさず、こつこつこの山奥で一人がん張っちよる」。宮崎便独特のなまりのある言葉で、夜が明けるのも忘れて岩本さんの論談は続いた。

宮崎の地方紙から朝日の嘱託通信員としてはいり、以後高千穂で 10 数年間もの長い間、地方第一線記者として取材にあたってきた。それだけに岩本さんにとって高千穂は

最大の思い出の地であったろう。カメラを肩に飄々呼（ひょうひょうこ）として山間部を歩き回っての取材。当時まだ寒村へき地だった村落に行っては住民の福祉を考え、町政に活を入れ、また辺地学校では子どもたちと遊びながら青雲の志を説く。夫婦げんかの仲裁に引張り出されたことも再三だったとか。留守中、贈答品が来ていると「新聞記者が品物をもらってはいかん」と家族を一喝。どんな深夜でも一山、二山越えて品物を返しに行った潔癖漢でもあった。宮沢賢治の“雨ニモ負ケズ”の一節にも似た、いまはなき岩本さんの横顔が思い出される。

岩本年詮さんのメール（2021年6月24日）

志水氏の「古武士の風格」の表現は、主観的なもので、多少オーバーに表現したのかもしれません。戦地で死線を超えてきたせいとか、何事にも物怖じしない人でした。また酒が入ると「自分のペンの力で、その地方の文化や産業が発展すると良い」といつも言っていました。

土呂久取材記者

日向日日

岩本利佐男（22年頃～27年3月）

笹山通（27年3月～29年9月）

宮崎日日（昭和36年1月より）

朝日

岩本利佐男（27年6月～40年末）

児玉義英（42年頃）

杉本正基（43年頃～44年頃）

井之口勝男（44年頃～48年頃）

夕刊ポケット

興梠敏夫（30年～39年）

夕刊デイリー

興梠敏夫（39年～60年）

113-8 岩本利佐男記者による土呂久記事（1948年～1953年）

日向日日新聞記事（昭和23年10月20日）

含有率は世界的 / 新鉱脈開く土呂久鉱山

銀と銅をとるためサンヤ大壺が開いて400年の歴史をもつ西臼杵郡岩戸村土呂久鉱山は終戦後休鉱状態だったが、中島産業土呂久鉱業所では3月以来再開作業をはじめ8月に採鉱を開始し、間もなく硫砒鉄鉱の新鉱脈にぶつかり日産6トンないし7トンが採掘されているが、平均含有率は35パーセント、良質部分で42パーセントという世界的高含有率で各方面から注目されている。18日午前10時から鈴木社長以下会社員によって盛大に復興祭が行われた。なお硫砒鉄鉱の世界最高の含有率は46パーセントとなっている。

日向日日新聞記事（昭和 25 年 9 月 28 日）

#### 土呂久鉍業所鉛採鉍に方向転換

亜硫酸鉍業で不振を伝えられていた西臼杵郡岩戸村土呂久鉍業所では方向転換を計画、戦時山錫採鉍の際邪魔になるため放置していた酸化鉛、亜鉛などの方鉛鉍が沢山あるため鉛採鉍に乗り出すことになり、10月1日旧坑の掘進を開始、1カ月で着脈採鉍にかかり、鉍石搬出は26年早々になる計画で、土呂久再興を目ざして再出発をする。

朝日新聞宮崎版記事（昭和 28 年 7 月 11 日）

#### ヒ鉍製錬で“浮かぶ労使” / 土呂久鉍業所に試験炉設置陳情 / 県側も協力を約束

西臼杵郡岩戸村土呂久中島鉍業土呂久鉍業所労組佐保組合長は9日、県労評門田副議長とともに保坂県経済部長を訪ね、アヒ酸製錬のための試験炉新設に協力して欲しいと陳情した。

同鉍業所は月産銅60トン、銅ヒ鉍47.8トン、ヒ鉍7.8トン（本年6月現在県商工課調べ）を出す小規模な銅山で、昭和16年までは同所でヒ酸を製錬して利益をあげていた。ところが煙害を被るとの部落民の反対があつてヒ鉍のバイ焼をやめ、以来鉍石は原石のまま宮城県に送っている。原石のまま遠く輸送するため採算がとれず組合員（55名）は5500円ベースという低賃金に苦しんでいる。もし同所がヒ鉍を製錬すれば月60万円の利潤が上り、労使ともに助かるばかりでなく、鉍石の埋蔵は多大でありネコの額ほどの田畑で苦しい営農をやっている地元民にも副収入を与え、将来は県の重要産業にも発展する可能性がある」と強調している。

部落民は反対意思を翻していないが、同鉍業所は鉍石には硫黄分が少く、炉も吸収力の強い性能のよいものができる今日、煙害は昔ほどなく、児湯郡西米良村松尾鉍山も同じ方法で部落民の協力のもとに経営をつづけているといい、部落民の理解をうるよう県労評も側面から啓蒙運動を実施すると約束、保坂経済部長は「資源開発の意味からも協力するが地元民の納得が大切だ」と答えた。